平和の礎

海外引揚者が語り継ぐ労苦 Ⅵ

平和の礎

海外引揚者が語り継ぐ労苦

平和の礎
海外引揚者が語り継ぐ労苦 VI
平成八年三月三十日　印刷
平成八年三月三十日　発行
編　集　東京都文京区大塚五丁目三番十三号
発　行　平和祈念事業特別基金
印　刷　株式会社ニッケイ印刷

まえがき

平和祈念事業特別基金は、今次大戦における尊い戦争犠牲を銘記し、かつ、永遠の平和を祈念するため、関係者の労苦について国民の理解を深めること等により、関係者に対し慰藉の念を示す事業を行うことを目的として「平和祈念事業特別基金等に関する法律」に基づいて設立されました。

当基金では、その業務の一環として、関係者の労苦に関する調査研究を実施しており、この「平和の礎――海外引揚者が語り継ぐ労苦――」はその成果を取りまとめたものです。

この業務の実施に当たり、当基金は、平成元年度から社団法人引揚者団体全国連合会に、主として次の三つの観点から引揚体験者の手記の執筆等により、労苦の実態を明らかにすることをねらいとして調査研究を委託してきました。

(一) 海外居住の動機と家族状況
(二) 終戦直前・直後の生活の変化
(三) 引揚及び生活安定までの労苦

同連合会では、全国的に活発な調査研究活動を展開し、関係者から数多くの体験記等を収集し整理の上、「海外引揚者に係る労苦に関する調査研究報告書」として基金に報告がなされました。

報告された労苦記録の各篇には、海外居住者の引揚げにまつわる数々の労苦がつづられており、過酷な状況の中で生死の境をさまよいながらの引揚げ、引き揚げ後の生活再建の過程での艱難辛苦といった労苦の実態が、簡潔であるが往時を想起させるに十分な迫真の筆致で生々しく描かれています。

本書は、体験者にして初めて明らかにされる具体的な労苦の記録であり、戦争の残虐さ、残酷さ、悲惨さ、その上いかに無意味なものであるか、翻って、平和がいかに尊いものであり、大切なものであるかを改めて教えてくれるものです。戦後五十年を経過した今日、海外引揚者の労苦を徒労に終わらせないためにも、この労苦を子々孫々に語り継いでいくことが必要であり、そのためにも、この書は貴重なものと考えます。

最後に、調査研究に当たられた同連合会関係者のご努力と多くの方々のご協力に感謝するとともに、本書が平和祈念の書としてたくさんの人に読まれ、平和の一助となることを願うものです。

平成八年三月

平和祈念事業特別基金
理事長　永山喜緑

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

海外引揚者が語り継ぐ労苦　Ⅵ　目次

まえがき　永山喜緑

〔満　州〕

父母の恩は山より高く　小泉　周　1
　海よりも深し
一少年の記憶　會田　鋭一郎　15
渡満―終戦―逃亡―帰国の記　鈴木　康夫　27
父を求めて北満横断の旅　佐藤　彰恭　42
北朝鮮鎮南浦疎開者三十人救出　神代　忠正　59
第一次武装試験移民の妻としての　永井　かほる　74
　引揚げの記
臨月の妻が　近　庄次　88
　愛児の遺骨を胸に引揚げ
引揚げ体験記　則竹　次郎　108
生きる　後藤　英子　123
義勇軍中隊長として生徒を引率　田中　鈴夫　138
ああ痛恨の第九次徳命開拓団　所　みゆき　151
引揚げ作戦の舞台裏　古路　喜一　163
岐阜県送出第七次満蒙開拓　林　修三　174
　青少年義勇軍
　　田中中隊の一員として
亡き父の拓魂に学ぶ　板倉　博明　188
終戦の日を迎えて　杉山　茂代　199
南無妙法蓮華経　境野　静子　213
満蒙建設を省みて　浦郷　布治衛　227
亡き夫の姿を瞼に浮べて　松元　ヒナ　240

〔樺　太〕

引揚げの記　高山　文治　254
泰東丸の沈没から逃れた我が家族　須郷　キミ　268
耕　心　佐藤　隣　278
波間に消え行きし人々よ　蜂屋　豊子　292

〔朝　鮮〕

北鮮から姉と弟の引揚げ体験記　中本　信子　304
終戦前後　橋本　薫一　319
平和よ永遠に　檜垣　正人　334

語り継ぎたい願いと
遺しておきたい祈り　宮田　榮一　349
北朝鮮から　後藤　基憲　364
〔その他〕
苦難の中の友情　中川　初枝　380
フィリピンから
孤児となった初恵を連れて　三橋　真砂　395
あとがき

満州

父母の恩は山より高く　海よりも深し

岩手県　小泉　周

昭和二十年八月十五日、玉音放送があるというので、隣組の組長さんの家に集まるようにとのことで、長女良子を背負い、長男隆男と手をつないで伺いました。

終戦のお話で、「これからの道は苦労の多い道であろうけれども、心して生き抜くように」とのお言葉だけが私の心の中に深く残りました。

夜になって、隣に住んでいる訓練所の事務員さんが来られて、「明日、布団一組と必要品を持って日本に帰るのだから」と言われ、「小泉さんはたくさん靴を持っておられたから、一組欲しい」ということでした。戸棚の中の天井にぶらさげてある中から、これが良いというのを出してあげました。

主人は赤紙応召がきて、昭和二十年五月十三日に実弟敬雄大尉が戦死された東満州国境方面に、出征しました。ここは安東市前陽村である。ここから安東に出て新京を通り、ハルビンに行き、国際列車に乗り換えて東満州に行くのである。出征する主人を前陽村で見送るとき、訓練所の皆様も送ってくださいましたが、一番先に「お父ちゃん万歳」と両手をあげたのは隆男でした。それに続いて皆が万歳万歳と送ってくださいました。あまり急だったので主人とは詳しい話もできず、支度に追われて見送った後、机上を見たら、レタ

ーペーパーに、一、夜泣きをする良子をなるべく背負わずに、昼間十分遊ばせて育てること。二から十まで書き連ねてありました。

家では、ひよこを飼い名を隆男どり、良子どりと呼ぶことにしましたが、いつも家の前で遊んでいるので、呼ぶようなこともないまま大きくなり、完全に鳴けないけれども、格好を作り「ケッコウケッコウ」と鳴くようになりました。朝は、「おはよう！もう起きなさい」と鳴き、卵を産めば、「コケコッコウ」と鳴くから、「隆男鳥は良子鳥をほめてやるんだよ」と、子供たちに話をしていました。

ほとんど雨の降らない安東です。燃料は粉石炭と粘土を混ぜて型に入れ練炭を作り、庭に転がして置けば一日で完全に乾燥される。安東でとれた白魚（十センチくらい）をみりんと醤油に一晩漬けて、一尾ずつえら穴に糸を通し吊して乾かす。軽く焼いて食べると誠においしいものです。慰問袋の中に、これを入れて戦地の主人に送ったのです。復員して来て、聞いたところ、慰問袋も洋服も届いてなかったそうです。

大陸は雨が少ない。一度も雪下駄を履いたり、高下駄を履いたことがない。むしろ部屋の中に濡らしたタオルをかけて置かないと乾燥しすぎてのどを悪くする。子供たちの生まれた吉林では、心してタオルをかけたものでした。午後五時になるとスチームが入り、音をたてる。あのころ（昭和十四年）としては、文化生活の始めころだと主人が言っていました。

非常時に備えて買っておいた大きな〝すずき〟一尾（当時八十円）分は塩漬けにしていたのを焼き、半紙に包み、更に新しいハンカチに包んでおく（今のようにビニールのない時代である）。塩がにじみだしてきたが、子供たちの蛋白質の助けにと思い食べさせたが、二人ともあきもせずよく食べた。お風呂をたてると子供たちを入れ、知り合いの大津さんもお子さんが小さいので、「後風呂でもよい」といったけれども入れてあげる。捨てて行くのも残念なので、コンデンスミルク缶をお土産にあげたら大津さんは喜んで帰られた（そんなこともあった）。終戦になったので、日本に近い安東から出征した人は帰って来ました。大津さん

の御主人も帰って来られ、「小泉さんは必ず帰られるから」と確信ある話をして励ましてくれた。大津さんの引揚げ先は大分県だから、「帰ったらパン屋でもして生活しよう」と話しておられたが、今どうしておられるかしら！

昭和二十年八月十五日午前十一時ごろ、武装解除前の兵隊さんが運転してトラック四台が村へ入ってきた。所長の太田さんが軍隊に願いに行ったそうである。これで安東市に出て内地に帰られるかと思った。でもどんなことが起こるか分からない。子供らとはぐれないようにと、ただそれだけを思った。最後の四台めに乗るようにと言われて乗ろうとしたら、三台めのトラックからコッコッと鶏の声がする。「お母ちゃん、おじちゃんも鶏を持っている。家のも連れて来ればよかったのに」と泣かれた。私独りで何が起こるか分からないときに、鶏二羽も育てられない…これからどんな所に移動するか分からないから、日本に帰ったらまた買ってあげるから」と話した。乗って見ると、小学校校長先生の奥様と子供さん四人、横井さんの奥様と赤ちゃん一人、私と子供二人、大東港建設局の方三人ばかりである。夫が出征して帰らない家族だけねと、だれかが言っている。そして着いた所が安東の朝鮮人の社宅であった。社宅の人たちはいち早く祖国に帰り、空家になっていたのです。日本に帰るなどとは嘘でした。これから共同炊事が始まるというのです。まず食事は油いため、夜は雑魚寝です。〃時計も兵器と見なす〃〃逃げるときは子供を泣かせてはいけない〃と言われ、着のみ着のままズックを足から離さず、子供たちも疲れ切って眠っている。夜中に起こされると夜警と称し、また軍の検閲と称し兵隊（八路軍）が来て回る。私の真っ赤な洗面道具の小物入れの前で離れない。財布とにらんだらしい。開けてみて納得して行ってしまった。ああ八路の兵隊に化けているんだと思った。負けた国民の一場面である。ドーンドーンと大砲の音が遠くから聞こえる。

日本人、特に男性は〃日本人であることが一目で分かるようにすること〃という話が伝わってきた。人が殺されたが、朝鮮人がやったのか、日本人がやったの

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

か分からないというのが理由である。女は大体もんぺ姿ですから、もんぺの上衣の袖をとり、男も洋服の上に袖無し半纏を着ることになり、それからはあまり殺された話は聞こえてこないが、日本人の市長格の方々が、八人も六道構で銃殺されたとか、されないとかうわさが聞こえてくる有様で不穏な状態は続きました。共同炊事も長くは続かず、部屋の割当があり、私たち三人は北側の四畳半に移った。台所道具もない、茶碗一つもない。持っているのは箸と弁当箱ぐらいのものでした。内地へ帰るという話であったからと言ったとて、今更どうにもならない。南側の六畳は鶏を持ってトラックに乗った山田さん一家です。まず台所に行ってみた。我が家の上等の皿類茶碗類、各種の容器が並べられている。「あら、私の家の茶碗だわ」と思わず大声が出てしまった。山田さんの奥さんが出て来た。「山田が前陽村の訓練所の二階に集めてあったものの中から持ってきたと言うのです。「それでは私にも使わせてネ」というわけで使わせてもらいました。七輪は朝鮮人の使ったのが捨てられてあったから、ロストルをそこらに落ちていた釘と粘土で修理して使わせてもらった。主人が出征して行ったから、皆、紙で一個ずつ丁寧に包んで、いつでも運び出せるように始末しておいたのが役立ち、偶然とは申しながら誠に有り難いことです。「神様・仏様は見えない所で見ていてくださること」と思って、ただ感謝でいっぱいでした。それから二日後に大東港建設局のトラックが安東に行くということを聞いた。今まで住んでいた前陽村を通るわけです。所長に前陽村に行く許可をもらいに行ったら、行ってもいいが生命は保証しないということでした。「子供二人預かってやるから、あなた一人で行ったらいいんじゃない？」と言ってくれる人、それに賛成する人もいたが、私は生きるも死ぬのも子供たちと一緒にと思い、良子を背負い隆男を連れて、わずかばかりのお菓子を持ちトラックの所へ行ったら、主人の教え子で家にも泊まりがけで遊びに来られた山崎様が乗っていられるのに驚き、そして喜んだ。「前陽村を通るかしら」「通りますよ」「治安はいいですか」「何にも変わりありません」「私、お力をお借りした

いです。乗せていただき、帰りもまた乗せて来て欲しいのです」と言うと、「大丈夫、面倒をみますから乗ってください」と言われ子供二人と乗った。何と有り難いことかと、今思い出して書いていても、字が見えなくなるほど有り難く涙が流れます。このことがあったからこそ、今の自分があると思う。天井裏の荷物七箱分と訓練所に集められた荷物の中から枕三個を持ってきた。胡瓜の味噌漬（一斗樽）は部屋の中に出ていたが、自分の車でもないので持つのはやめました。小豆の枕が体に良いというので作っておいたのが、とんだ所で役立つことになりました。七箱分は口のあいたままです。衣類は私が広げる。満人がすかさず「三十円」と叫ぶ。途端にお金と着物の交換です。一万円の金ができた。みんな十円札です。主人の洋服は大きいので、ソ連兵が買っていくと、最高の値段、金八百円で売れました。

ソ連兵がトラックの上に乗って通る。隆男は遠くから見ている。「あの兵隊さんは赤い顔をしているね、お酒を飲んだの？」と聞く、「飲んではいないけれども、トラックの上は風が冷たいので、外人は色が白いから赤くなるのよ」というと、「そう」とうなずいてました。

日が経つにつれ、私どもの住宅にも「ボロ買います」と叫んで歩く満人が通るようになり、日本人の魚屋さんも来る。魚屋さんから少し魚を買ったときです。支払いしたら、「うちのお母さん、枕にいっぱいお金を入れているもの」と言って両手でマルを作って見せた。「坊や、そんなことを人の前で言って、取られるとお母さんが困るから、言わないんだよ」と静かに言ってくれたので、隆男も困った顔になったがすぐ分かったのか気を取り直し、良子も背中でうなずいていた。その夜こたつに入り、懐中電灯をつけて金を数え、体につけることにした。モンペをはいていたから、目立たないように思えた。風呂はいつも山田さんのお父さんを先に入れてあげた。少々湿疹のある人だったので時々腕に包帯をしていた。もう一度風呂の温度を上昇させてから子供を入れたから、感染することはなかった。男の方々が夜警をして女子供を守ってくれました。

これも有り難いことでした。前に書いた八路軍は一種の泥棒であったらしく、あれ以来は来ませんでした。新京に住んでおられた須藤様も、朝鮮経由で日本に帰ろうとして来たら帰れなくなり、安東に戻って生活することになり、時々奥様が尋ねてくださいました。

突然、明朝までに引っ越しをするようにと命令あり、そんなこととは知らず、この冬を越すのに薪や木炭を買いこんで、どうしたらよいものかと思っていたら、主人の大学時代の同級生（須藤・千葉・鎌田様）が荷車をひいて来てくださいました。それで次の家へ移動することができ、本当に感謝でいっぱいでした。

私も子供たちと遊んでばかりはおられないと、新京から転勤するときに、購入した明色水白粉、メンソレータムや眼薬、シッカロールを売り歩いていると、六十歳ぐらいの立派な繻子の満服を着た老人が、日本語を上手に話せる十五歳ぐらいの男の子を連れて歩いているのに出会い、男の子は突然「この子は立派だから連れて行ってもよいですか」と言う。あまり突然のことで返事に困っていると背負われている良子が「満人は何だかんだとうるさいね」と早口で励ましてくれた。良子は足は少々遅かったが口は達者で、かつ早口であったから、男の子はわからなかったらしく、「男の子は一人だから連れて行かれては困ります」と言ったら、「よろしい」と行ってしまいました。隆男四歳十一カ月、良子二歳六カ月でした。今思い出しても有り難い子宝で、負けた国民の異国での一場面です。

安東市の市公署が八路軍の病院になっているそうだと聞いて、薬剤師免許証を持って行った。院長さんは張さんという女性で、腰にピストルを下げていた。免許証を見せると二つ返事で「月給は支給できないが、弁当箱二つに御飯とお料理を入れて帰ってよろしい」と言う。そして洋服の上衣に赤十字と赤く書いてある腕章をくれて、「毎日洋服の上衣につけて歩くように」と言ってくれ、病院では皆が大事にしてくれました。一枚の免許証の有り難さをしみじみと感謝し、遠くにいる両親を拝みました。白衣の裁断は黒沢様の義姉様にお世話になり、天竺布を手で縫う。お互いに技術はこういう時に役立つものだと教えられた。須藤様の奥

様にご相談したら、「大丈夫子供はみてあげるから」と言われ、隣の森山様の奥様も大丈夫と言われました。毎日二人ともプラタナスの木陰で同じように、土いじりをして遊んでいました。子供心にも何か決心するものがあったと思いました。雨の降らない安東は新京、吉林と違い暖かく助かりました。

病院の薬局の女の助手Mさんが、病院の大きなアカシアの枝先の花を天婦羅にしたら、とてもおいしかったと御馳走してくれました。私も一枚もらって子供らに食べさせた。二人とも食べてくれた。日本に引き揚げてから四十三年になるが食べたことがない。忘れられない思い出として残っている。また看護婦のTさんは、トランプで主人がどこにいるか当ててあげると言うので占ってもらったら、「安東から八時間ぐらいの所にいると出たから、きっと朝鮮におられるわ」と言ってくださる。帰国してから聞いてみれば、朝鮮で伐採をしていたという。当たるものだと感心した。

秋の日だまりで、子供たちの遊ぶのを見守っていたら、左腕に七つも時計をしている人を見た。主人と一緒に現場で働いていた張さんである。「主人は?」「軍隊に行った。僕も御主人にお世話になったから」と言って、三千円をくださった。私はこれからどうなるか分からないし、お礼ができないからいただけないと断ったが、何としてもあげると言うので有り難くちょうだいした。大福餅一個一円のときである。「奥さん多々辛苦だね、多々謝々再会」と言って別れた。今は北朝鮮か南朝鮮か分からないが、健康で幸せに過ごしておられることを遠くから祈るのみです。

ある日、病院に主人の職場の人が満人を連れて面会に来た。何事だろうと付いて行ったら空家に着いた。「オキシドールやアスピリンは作れないか、作れるならば安東から奉天まで汽車を出すから」と言うのです。何しに来たのだろうかと思ってるうちに、子供二人ぐらいなら育てられると、相変わらず目をパチパチさせながら話している。変な話になったなあと思って聞いていたら、薬剤師の私を満人に売り金もうけをするつもりの腹がよめた。戦争が始まり主人は出征、子供二人を連れて苦労している自分に、こんなことを考えて

いるのかと思ったら全く驚くばかりで、「オキシドールとかアスピリンは製剤であって簡単に作れるものではない」ことを話し、「私仕事がありますので失礼します」と病院に戻って仕事をすませ、子供たちの所へいつもより急ぎ帰りました。製剤というので思い出しましたが、〝純樟脳〟を持っていたので、それで凍傷軟膏の作り方を黒沢さんに話したので、おじい様、御主人様が一緒になって作って売られたのだと思う。私にも樟脳代として百五十円くださった。私が得た金はこれだけだったが有り難いことであった。八路軍の病院薬局に残したノートはとても役立ったわけである。これも薬学科四年生の夏休み、東北大学薬局で一カ月研修し、卒業後すぐ仙台簡易保険薬局に満三年勤務したお陰と感謝している。二十年ほど前になりますが、黒沢さんが石鳥谷のクラス会に来られた折にお会いして引揚げの話をし、お互いに涙を流して昔を語り全く苦労したものだと、再会を喜びあったものです。同じ薬剤師でしたから懐かしい思い出でした。

病院はラコソウに移動するということになったが、私は昔の考えで、隆男は小泉家の長男の子として、日本の親もとに連れて帰らなければならないから勤務も辞めようと決心して、日本に帰る準備を始めた。夢中で過ごした毎日であったが皆様に助けられて三カ月ぐらい働いた。おやつをくださった森山様に時には昼食まで御馳走になった。須藤様の奥様が来られると、子供たちも喜ぶ。奥様は「私ここに来ると一番気持ちが休まるの」と言ってくださる。子供のない方でいらっしゃるのに、と思う。お互いに心楽しいひとときで救われた。内地に帰ったら、是非「一の関に行くわ」と言っておられた奥様も、帰国してから病気で亡くなられた由、ついに再会はできず、今もなお、残念でならない思い出です。この年になれば、つらかった思い出を共に語る友達があればよかったのにと思う。

安東の初冬での出来事はあまり思い出せない。ただ毎日が子供に振り回されることであった。日詰の大志田さんが箱型でない橇を隆男に造ってくださり、大声をあげてすべり、喜んだことを思い出した。「お母ちゃん今度日本に帰るときは、橇も忘れないで持って帰

ろうね」と言った。でも安東駅から奉天そして錦州と汽車で帰って来たので、小型の櫃はリュックにも入らないし、持ってこられなかった。私たち三人がトラックの荷台に乗せてもらったのがやっとであった。

そこはかとなく春めいてきて、草が伸びてきた。故郷の庭の草は雪の中に根は残っているが、満州の草や根は凍って枯れてしまう。

ようやく帰国の準備の洋服も出来上がりつつあり、帰国してもあまり不自由しないようにと準備したつもりであった。時々集まりがあって、日本は安定した状態でないという報告であった。子供二人が風邪一つひかずに冬を越したことが、何よりもうれしかった。

昭和二十一年七月十九日午前三時、小高い所にある伝染病院の裏に集まれば、金五千円也（大人一人）で奉天に連れていってくれるそうだからと、大信田さんが来られた。終戦後、隣組に岩手県人の兵隊さんが入られたという話に、もし帰るときには子供が二人なので助けて欲しいと頼んでいたら、忘れずに誘ってくれた。「子供らが機嫌良く起きたら行くし、そうでないときは行かないから御了解くださるように」と話した。私が寝もやらず準備を始めたので、森山様御夫妻も眠らず手伝ってくれて〝長く歩くのは下駄がいいよ〟と下駄をくださったり、足袋を履いた方が鼻緒ですれないからと足袋を出してくださったり、本当に有り難いことでした。リュックサックも主人が富士登山に持って行ったのは良くできていたが、小さめなので大きい方に入るだけ詰めた。内地に行っても買わずに着せられるようにと。先ず良子を起こした。「日本に帰るから！良子起きてよ」、寝ぼけもせずに「あら、日本に帰るの！」とにっこりした。支度をさせて食事を与えている間に隆男を起こす。「日本に帰るんだから起きて、午前三時までに裏の山に集まることになっているの」これまた機嫌良く起きてくれた。にっこりした良子の顔が忘れられない。満州であまりにっこり笑っていると物足らん子と見られるのだと言われたので、笑わないようになった。大きなリュックサックを背負い、良子を前に抱きひもをかけ、左手に鍋、隆男の手を右手でひき、森山様ご夫妻に送られ、残した荷物の処分

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com